

二〇一九年度大学入試センター試験 解説 〈古典〉

第3問 古文 『玉水物語』

〔出典〕

『玉水物語』は、室町時代に成立したと見られる物語（御伽草子）である。

近年のセンター試験本試験の古文の問題は、平安時代の物語・鎌倉時代の擬古物語・江戸時代の仮名草子など物語（小説）類からの出題が多く、本年度の出題もその傾向からはずれていない。内容は難しくないが、問題文の量が例年に比べて二割程度長く、狐が姫君に恋をするという非現実的な内容であるため、最後まで物語の展開を正しく理解して読み続けるには読解力と気力が必要である。また、本文最後にある和歌・連歌の解釈は、受験生にはやや難しく感じられたかも知れない。

〔通釈〕

ちよどその頃、この花園に狐が一匹おりましたのが、姫君をお見かけし、「ああ美しい御姿だなあ。せめて時々でもよいからこのような（姫君の）御姿を、よそながらでも見申し上げたいものだ」と思って、木陰に立ち隠れて、気持ち静まらずお慕いしたのは驚きあきれたことだ。姫君がお帰りになってしまうと、狐も、こうしているわけにもいかないと思って、自分の（ねぐらである）塚へ帰った。つくづくと座禅を組んで我が身の有様について思いを巡らすと、「自分は、前世のどのような罪の報いによって、このような獣と生まれたのだろうか。美しい人「姫君」を見初め申し上げて、かなわない恋路に身もやせる思いをし、むなしく死んでしまうようなことは残念だ」と考え、さめざめと泣いてうつ伏して悩んでいた。そのうち、上手に（人に）化けてこの姫君にお逢いしたいと思ったが、また思い直したことはない、「私が、姫君にお逢いしたら、きっと（姫君の）御身が損なわれなさってしまうだろう。（姫君の）両親のお嘆きもさることながら、この世にまたとないほどの（姫君の美しい）御姿を、台無しにし申し上げるようなことはお気の毒で」と、あれやこれやと思ひ乱れて日々を暮らしているうちに、（思い悩むあまり）餌も食べないので、身も疲れて寝込んで過ごしていた。もしかしたら姫君のことをお見かけできるかと例の花園によろめきながら出ていくと、人に見つかり、ある時は石を投げられ、ある時は神頭矢を射かけられ（たりしながらも）、ますます心を焦がしたのはしみじみとかわいそうなことである。

なまじ（生きながらえて）露や霜のようにあっけなく消えきることもない命を、（狐は）つらく思ったが、なんとかして（姫君の）御そば近くに参上してお仕えし、朝に夕に（その御姿を）見申し上げて（わが）心を慰めたいと思いい悩んで、ある民家に、男ばかりが大勢いて娘を持たず、大勢いる子供たちの中で一人だけでも女の子であれば（よいのに）と朝夕嘆く人がいるのをあてにして、十四、五才の容貌のきわだって美しい娘に化けて、その家に行き、「私は都の西の辺りに住んでいた者です。（家族を失い）縁者もない身の上となり、頼りとする人もないままに、足が向くに任せてここまで迷いながらやって来ましたけれど、訪ねて行ける所も思いつきませんので（こちらのお宅を）お頼り申し上げたいのです」と言った。主である女は娘を見て、「（それは）お気の毒なことねえ。並々ならぬ（優美な）御姿で、どうやって迷いながらもここまでたどり着いたのでしょうか。いつそのことを私を親とお思い下さい。男は大勢おりますけれども娘を持つておりませんので、朝に夕に欲しいと思つていたので」と言う。（娘が）「それこそ嬉しうございます。どこといつて目指して行こうという所もございません」と言うと、（主である女は）並々ならず喜んで（この娘を）かわいがり家に置き申し上げた。（主である女は）なんとかして（この娘を）それなりに適当な人と結婚させ申し上げたいと努めた。しかし、この娘は、全くうちとける様子もなく、時々泣いたりなさるので、（主である女は）「もし気にかけていらつしやる男君などがございますなら、私に隠さずお話し下さい」と言つて慰めた。そこで、（娘が）「けつしてそのよくなこと」「慕つている男性がいるというようなこと」はございません。情けない我が身が厭わしく思われてこのように気分がふさいで憂鬱になつておりますので、男性と結婚することなどは思いも寄りません。ただ美しいような姫君などのおそばにお仕えして、御宮仕えいたしたいと思うのです」と言うと、（主である女は）「よいところに（お嫁にやつて）落ち着かせ申し上げたいと常に申し上げておりましたけれども、そのようにお望みならば、どのようにも御心に逆らうようなことはしません。（何より）高柳様の姫君が優雅で品もよくていらつしやいますから、（それに）私の妹が、そのお宅にお仕えして働いておりますので、（お仕えできるか）聞いてさし上げましょう。なんでも気やすく、お思いになるようなことはお話し下さい。（お気持ちに）背くことはいたしません」と言うので、（娘は）たいそう嬉しいと思つた。

このように話していたところに、例の者「主である女の妹」が来たので、この事情を話すと、「（では）そのことを申し上げましょう」と言つて、（主である女の妹が御屋敷に）立ち戻つて（姫君の）乳母に相談すると、（乳母は）「それならただちに参上させよ」とおつしやる。（娘は）喜んで身だしなみを整えて（姫君のもとへ）参上した。（娘の）見た目、顔立ちが、美しかったので、姫君もお喜びになつて、（この娘に）呼び名を玉水の前と付けなされる。（娘は）何かにつけて優雅で品よく風情があつて、姫君の音楽の遊びの折や、（それ以外でも）朝に夕に（姫君の）おそばに馴れ親しみお仕えし、（姫君の）御手水「洗顔を手洗いのための水」のお世話をし、お食事を差し上げ、（寝る時は）月夜「姫君の乳母子」と同様に姫君の御裾近くに寝て、そばを離れることなくお仕えした。お庭に犬などが来ますと、（もとが狐であるので）この人「娘」は、顔色が変わり、（恐がつて）身の毛がよだつよう、食べ物も食べられず、ただならぬ様子であるので、（姫君は）気のお毒にお思ひになつて、御屋敷内に犬をいさせないようになさる。「あまりに異常な恐れり方だなあ」「この人「玉水の前」の受けるご寵愛の深さのうらやましいことよ」など、周囲には妬む人もいるに違いない（と思われるほどの御寵愛ぶりであ

る)。

こうして時が過ぎていくうちに、五月の半ばの頃、格別に月も陰りなく輝く夜、姫君が、御簾の際近くへいざり「膝をついたまま移動すること」出ていらっしやうって、ほんやりとなさりながら(月を)ながめなされた折に、ほととぎすが鳴きながら飛び去って行ったので、

ほととぎす…ほととぎすが雲のかなたで声を上げて鳴くよ

と(姫君が)詠みなされたところ、玉水はすぐに、

深き思ひの…何か深い思いがあるのでしょうか

(と付け、詠み終えると)すぐに「私の心の中…」とほそほそと口ごもるように申したので、(姫君は)「玉水の悩みとは)何事であろうか、心の内が知りたいものだ。恋であろうか、それとも人を恨む気持ちなどもあるのだろうか。あやしいことだ」と思って、

五月雨の…五月雨が降る間は雲の上にいるほととぎすは、誰の思い寝「恋しい人などを思いつつ寝ること」の様子を知って(あんなに鳴いて)いるのだろうか。

(と詠んだ。)

〔解説〕

問1 解釈の問題

重要単語・重要文法を確認し、前後の文意や前書きなども踏まえて解答したい。

(ア) 基礎

「しづ心なく思ひ奉りけるこそあさましけれ」の解釈として最も適当なものを選ぶ。

「しづ心／なく／思ひ／奉り／ける／こそ／あさましけれ」と単語分けされる。

「しづ心」は、「静心」で、「落ち着いた心」のこと。これが正しいのは、②・④・⑤。「奉り」は、「〜申し上げる・おこなう」に訳す謙譲の補助動詞。これが正しいのは、②・⑤。①には敬語の訳がなく、③の「おくになる」・④の「なさる」は尊敬語の訳である。「ける」は、過去の助動詞「けり」の連体形。⑤はこれが訳されていない。「こそ」は、強意の係助詞であるが、いずれの選択肢でも特に訳には反映されていない。「あさましけ

れ」は、主に「驚きあきれるほどだ・意外だ」、また「情けない・あさはかだ・見苦しい」などと訳す形容詞「あさまし」の已然形。これは、①・②・③・④は正しく、⑤のみ間違っている。

よって正解は、全てのポイントが正しく訳されている②である。

例年の出題に比べると傍線部がやや長いが、重要単語・敬語・助動詞の訳から正解は得られる。

(イ) 基礎

「いかにして」の解釈として最も適当なものを選べ。

「いかにし／て」が一語化した表現。

「いかに」は、「どう・どのように・どれほど・どうして」などと訳す副詞。「し」は、サ変動詞「す」の連用形。「て」は、接続助詞であるが、「いかにして」で、基本的には②のように、「どのようにして」という意味になるが、「いかで・いかでか」と同様に、希望(願望)・意志の表現と呼応すると「どうにかして・なんとかして」と訳す。ここでは、後方にある「慰めばや」の「ばや」が願望(〜たい)の終助詞であるから、「いかにしてばや」で「どうにかして〜したい・なんとかして〜したい」と訳すことになる。

よって、正解は④である。

(ウ) 基礎

「この人の御おぼえのほど」の解釈として最も適当なものを選べ。

「この／人／の／御おぼえ／の／ほど」と単語分けされる。

「おぼえ」は、現代語と同様に「記憶」や「自信(腕におぼえがある)」の意も表すが、「(世間の)評判・人望」「(上位の人からの)寵愛」の意が問われやすい名詞。傍線部の直前には、女性に化けて姫君に仕え始めた狐が、姫君にかわいがられて、「玉水の前」と名づけてもらい、犬を恐がる(本性が狐だから)と、姫君が「御心苦しく思われて、御所中に犬を置かせ給はず(≡気の毒にお思いになって、御屋敷内に犬をいさせないようにする)」という配慮をしてくれていることが書かれている。それを見た人が「この人の御おぼえのほどの御うらやましさよ」と妬んだというのであるから、「おぼえ」は姫君が「玉水の前」を格別にかわいがっていること、つまり「寵愛」のことである。

よって、正解は⑤である。

正解 (ア) 21 (イ) 22 (ウ) 23 ⑤

問2 敬語(敬意の対象)の問題 標準

波線部 a～d の敬語(奉る・候は・侍る・参らせ)はそれぞれ誰に対する敬意を示しているか。その組合せとして正しいものを選び。

まず、敬意の対象について確認しておく。

敬意の対象

尊敬語：動作の主体(主語・動作をしている当人)に対する敬意を示す。

謙譲語：動作の受け手(動作の相手)に対する敬意を示す。

丁寧語：話の聞き手に対する敬意を示す。

- ・ 会話文中の丁寧語 会話の相手に対する敬意を示す。
- ・ 地の文の丁寧語 読者に対する敬意を示す。

a 「奉る」は、謙譲の補助動詞。謙譲語であるから、動作の受け手(相手)に対する敬意を示す。「もしや見奉る」は、狐が、「もしかしたら姫君のことをお見かけできるか」と思って花園へ行ったという場面にある。「見奉る」は、狐の動作であり、その動作の受け手(相手)は「姫君」であるから、a の「奉る」は、「姫君」に対する敬意を示していることになる。a が正しいのは③・④・⑤である。

b 「候は」は、「あります・ございます」などと訳す、丁寧の本動詞。丁寧語であるから、話の聞き手に対する敬意を示す。「もし見給ふ君など候はば、我に隠さず語り給へ」は、うち解ける様子も見せず泣いている「娘」(狐が化けた女)を見て、「娘」の面倒を見ている「主の女房」が、慰めようとして「もし気にかけていらっしゃる男君などがございますなら、私に隠さずお話し下さい」と言っている会話文中にある。話し手は「主の女房」、聞き手は「娘」であるから、b の「候は」は、「娘」に対する敬意を示していることになる。b が正しいのは②・④・⑤である。ちなみに、①・③

の「見給ふ君」は、「娘が気にかけている男性」のことだが、これは「主の女房」がそのような人がいるのではないかと推測しているだけで、実際にはそのような人物は登場していない。ここで、答は④・⑤に絞られる。

c 「侍る」は、丁寧の補助動詞。丁寧語であるから、話の聞き手に対する敬意を示す。b で見た、「主の女房」の、「もし見給ふ君など候はば、我に隠さず語り給へ」を受けて、「娘」（狐が化けた女）が、「人に見ゆることなどは思ひもよらず」（＝男性と結婚することなどは思いもよりません）と前置きし、「ただ美しからむ姫君などの御そばに侍りて、御宮仕へ申したく侍るなり」（＝ただ美しいような姫君などのおそばにお仕えして、御宮仕えいたしたいと思うのです）」と答えている会話文中にある。話し手は「娘」、聞き手は「主の女房」であるから、c の「侍る」は、「主の女房」に対する敬意を示していることになる。c が正しいのは②・④で、ここまでで正解は④とわかる。

d 「参らせ」は、「差し上げる」と訳す、謙譲の本動詞。謙譲語であるから、動作の受け手（相手）に対する敬意を示す。「姫君」に仕えるようになった「娘」（狐が化けた女）は「玉水の前」と名づけられ、朝夕「姫君」のそばを離れず、「御手水参らせ供御参らせ」た、つまり、「娘」＝「玉水の前」が「姫君」に対して「御手水（洗顔や手洗いのための水）のお世話をしたり、飲食物を差し上げたりした」のである。「玉水の前」が動作の主体、「姫君」が受け手（相手）であるから、d の「参らせ」は、「姫君」に対する敬意を示していることになる。d が正しいのは②・③・④である。以上から、正解は④である。

正解 24 ④

問3 心情説明の問題 標準

傍線部A「いたづらに消え失せなむこそうらめしけれ」とあるが、このときの狐の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを選べ。

傍線部は「いたづらに／消え失せ／なむ／こそ／うらめしけれ」と単語分けされ、「むなしく消え失せて（死んで）しまうようなことは恨めしい（残念だ）」と直訳される。

「いたづらに」は、「無駄だ・むなしい」などと訳す形容動詞「いたづらなり」の連用形。「消え失せ」は、これだけでは、「姿を消す」(②・③)の意とも、「死ぬ」(①・④・⑤)の意ともとれるが、「いたづらになる」という慣用表現が「死ぬ」意であることも考え合わせれば、「いたづらに消え

失す」は「死ぬ」の意ととるほうが適当であろう。「な」は、完了・強意の助動詞「ぬ」の未然形。「む」は、婉曲の助動詞「む」の連体形である。現代語訳の問題ではないが、「消え失せ」にかかっている修飾語「いたづらに」の意味としては、⑤の「むなしく」が正しい。④の「のたれ死に」もその意を含んでいるように見えるが、①「罪の報いを受けて」、②「はやく」、③「なんとなく」は、いずれも「いたづらに」の意味に相当しない。「うらめしけれ」は、「恨みに思われる・残念だ」の意の形容詞「うらめし」の已然形。これが各選択肢の末尾に反映されているのであるが、正しいのは⑤、あるいは①である。

また、傍線部直前の「我、前の世いかなる罪の報いにて、かかるけだものと生まれけむ。美しき人を見そめ奉りて、およばぬ恋路に身をやつし」は、「自分は、前世のどのような罪の報いによって、このような獣と生まれたのだろうか。美しい人「姫君」を見初め申し上げて、かなわぬ恋路に身もやせる思いをし」という意味である。「身をやつす」は「みすばらしい姿になる・めだたない姿をする・出家する・(何かに打ち込んで) やせる思いをする」といった意味である。「いたづらに消え失せなむ」ことになるのは「およばぬ恋路に身をやつし」ためなのである。これが正しく説明されているのは⑤の「かなわぬ恋に身も心も疲れきって」しかない。

以上から、正解は⑤である。

①の「罪の報いを受けて」は、「前の世いかなる罪の報いにて」の意を取り違えている。

②の「何度も近づいたことで疎まれ」は、第一段落最後の「もしや見奉るゝあるは神頭を射かけられ」などが相当しそうだが、傍線部の時点ではまだ起きていない。

③は、「なんとなく」に相当する表現が本文にない。

④は「人間に化けるといふ悪行」が本文にない。

正解 ⑤

問 4 心情 (傍線部の態度を生んだ心情) 説明の問題 応用

傍線部 B 「この娘、つやつやうちとくる気色もなく、折々はうち泣きなどし給ふ」とあるが、娘はどのような思いからこのような態度を示したのか。その説明として最も適当なものを選べ。

傍線部の直前を踏まえて考える問題である。

傍線部自体は、「こ／＼の／娘、／つやつや／うちとくる／気色／も／なく、／折々／は／うち泣き／など／し／給ふ」と単語分けされ、「この娘は、全くうちとける様子もなく、時々泣いたりなさる」という意味である。

この様子を見て「主の女房」は、「もし見給ふ君など候はば、我に隠さず語り給へ（＝もし気にかけていらっしやる男君などがごぞいますなら、私に隠さずお話し下さい）」と言って慰めようとした。傍線部直前に、「いかにしてさもあらむ人に見せ奉らばやといとなみける（＝なんとかしてそれなりに適当な人と結婚させ申し上げたいと努めた）」とあるとおり、「主の女房」は「娘」によい結婚相手を考えていたので、「娘」が憂鬱そうにする姿を見て、他に好きな人でもいて悩んでいるのではないかと心配したのである。すると「娘（玉水の前）」は、「ゆめゆめさやうのことは侍らず。憂き身のめざましくおぼえてかく結ばれたるさまなれば、人に見ゆることなどは思ひもよらず。ただ美しからむ姫君などの御そばに侍りて、御宮仕へ申したく侍るなり」と答えた。「けつしてそのようなこと」「慕っている男性がいるというようなこと」は「ございませぬ。情けない我が身が厭わしく思われてこのように気分がふさいで憂鬱になっておりますので、男性と結婚することなどは思ひも寄りませぬ。ただ美しいような姫君などのおそばにお仕えして、御宮仕えいたしたいと思うのです」というのである。「娘（狐）」の本来の願いは姫君に近づくことである。そこで、「娘」の憂鬱な様子を心配する「主の女房」に対して、「憂鬱の原因は恋愛や結婚問題ではない。憂鬱を晴らすために美しい姫君のもとに宮仕えさせてほしい」と言うことで、「娘（狐）」は、自分の願いをかなえようとしているのである。つまり、「娘（狐）」は傍線部で、憂鬱な様子を見せ、「主の女房」の心配を引き出し、「姫君に仕えたい」という自分の本意を口にする機会を作ろうとしているのである。

よって、正解は、③である。

①の「意中の人との縁談を提案してくれるように養母を誘導したい」、②の「娘の可愛らしい姿を人前で見せびらかしたい」「逆らえない」、④の「養女としての立場ゆえの疎外感」、⑤の「養母をだましていることからくる罪悪感」は、いずれも本文に書かれていない。

ちなみに、「見る」や「見ゆ」に「結婚する」、「見す」に「結婚させる」の意があることは知っておきたい。これらを知っていれば、「人に見せ奉らばや」「もし見給ふ君など候はば」「人に見ゆることなどは思ひもよらず」などを正しく解釈することができ、正解を得やすくなる。

正解

26

③

問5 理由説明の問題 応用

狐が娘に化けた理由として最も適当なものを選び。(傍線部なし)

狐が姫君に一目惚れしたことは、前書きや、本文の冒頭を読むだけでわかる。よって、狐が人に化けたのが、「姫君に近づくため」であることも容易に察しがつくことである。実際に狐が人に化けたことが書かれているのは、第二段落冒頭の、「いかにして御そば近く参りて朝夕見奉り心を慰めばやと思ひめぐらして〽年十四、五の容貌あざやかなる女に化けて」であるが、「いかにして御そば近く参りて朝夕見奉り心を慰めばや」は「なんとかして(姫君の)御そば近くに参上してお仕えし、朝に夕に(その御姿を)見申し上げて(わが)心を慰めたい」という意味であるから、やはり狐が人に化けたのが「姫君に近づくため」であるのは明らかである。このことをはっきりと説明しているのは、①の「そばにいられるようにしようと考えた」であり、③「そばに仕えられるようになってから」と④「近くで仕えられる」も同内容を含んだ説明であるとは言える。

また、①は、「男に化けて姫君と結ばれば姫君の身を不幸にし、両親を悲しませることになると思い」が、第一段落本文六行目の、「我、姫君に逢ひ奉らば、必ず御身いたづらになり給ひぬべし。父母の御嘆きといひ、世にたぐひなき御有様なるを、いたづらになし奉らむこと御いたはしく」に相当して誤りが無い。この箇所は「私が、姫君にお会いしたら、きっと(姫君の)御身が損なわれなさってしまうだろう。(姫君の)両親のお嘆きもさることながら、この世にまたとないほどの(姫君の美しい)御姿を、台無しにし申し上げるようなことはお気の毒で」という意味である。狐が狐の姿のまま、もしくは、男に化けて姫君に逢おうとしなかった理由は本文にははっきりとは書かれていないが、理由として考えられるのはこのことである。ちなみに、「いたづらになる」は「無駄になる・だめになる・死ぬ」、「いたづらになす」は「無駄にする・だめにする・死なせる」の意を示す表現である。

一方、①以外の選択肢の内容には、本文の内容と合致しないことが含まれている。③は全体が間違っており、②の「縁談でも持ち上がれば、高柳家との縁もできるのではないか」、④の「望まない縁談を迫られている姫君」、⑤の「高柳家の姫君が自分と年近い侍女を探している」は、いずれも本文に書かれていない内容である。

よって、正解は①である。

正解

27

①

問6 内容説明の問題 応用

この文章では、姫君との関係において、玉水のどのような姿が描かれているか。その説明として最も適当なものを選べ。(傍線部なし)

この設問は、問い方は右のようであるが、要は内容合致問題で、特に本文最終部の和歌・連歌のやりとりを踏まえて考える問題である。

①は、第三段落の、「御庭に犬など参りければくかたはらにはねたむ人もあるべし」に相当する選択肢だが、「嫉妬を覚える」主体を「月冴」としている点が正確ではない。本文には「かたはらにはねたむ人もあるべし(≪周囲には妬む人もいるに違いない≫)とあるだけである。また、「周囲の不満に気づけない玉水の姿」といえる描写も本文にはない。

②は、本文最終部の和歌・連歌のやりとりに相当する選択肢で誤りがない。「玉水の秘めた思い」とは、玉水の付け句「深き思ひのたぐひなるらむ(≪何か深い思いがあるので≫)」に込められた思いのことであり、当然、言うに言えない姫君への思いのことである。「察した姫君は、それが自身への恋心であるとは思ってもよらず、胸中を知りたいと戯れる」という説明は、本文末尾近く、「何事にかあらむ、心の中こそゆかしけれ。恋とやらむか、また人に恨むる心などか。あやしきこそ(≪玉水の悩みとは何事であろうか、心の内を知りたいものだ。恋であろうか、それとも人を恨む気持ちなどでもあるのだろうか。あやしきことだ≫)」と「五月雨の」の和歌の内容に相当する。「ゆかしけれ」は、「見たい・聞きたい・知りたい」などと訳す形容詞「ゆかし」の已然形である。「玉水は何を悩んでいるのだろう、知りたい」と思った姫君は「五月雨の」の和歌を詠んで、「一体ほととぎすは誰の悩みを知って鳴くのだろうか」と、それとなく玉水の心の内を探ったのである。「おもひね」とは、「思ひ寝」で、「人を恋しく思いつつ寝ること・思い悩みながら寝ること」である。選択肢②にあるとおり、「打ち明けられない思いを姫君本人から問われてしま」ったのである。選択肢末尾の「せつない状況」は、そのままの表現としては本文にないが、それとなくとはいえ愛しく思う相手本人から、「おまえは誰を愛しく思っているのですか」と問われたのであり、それに玉水(狐)は答えようもないのであるから、「せつない状況」であるといって間違いはない。

よって、正解は②である。

③も、本文最終部の和歌・連歌のやりとりに相当する選択肢であるが、まず、「姫君が密かに心を寄せる殿上人の存在」が本文になく、従って、「姫君の恋を応援しようとする」も本文には全く書かれていない。「恋に悩んでいるのではないか」というのは、姫君が玉水に対して感じていることであり、玉水が姫君に対して感じていることではない。

④も、本文最終部の和歌・連歌のやりとりに相当する選択肢であるが、まず、「しつこく問い詰める」が誤り。②の説明でも述べたが、姫君は「五月雨の」の歌でそれとなく玉水の心の内を探っているのである。また、「私の思いをわかしてもらえないはずもないと、冷たい対応をせざるを得ない玉

水」は、本文には書かれていない。玉水に関する描写は、本文末尾近く、「ぐぢぐぢ申しけれ」が最後に、姫君の和歌にどう対応したかは全く書かれていない。

⑤は、最終段落、特に、「『あまりけしからぬ物怖ぢかな』ゝかたはらにはねたむ人もあるべし」に相当する選択肢といえるが、「涙にくれるような状況にある」は本文にはない。周囲の妬みに対する玉水の反応については全く書かれていない。また、②の説明でも述べたとおり、「五月雨の」の歌は姫君が詠んだ歌であるから、「歌で訴えている玉水」も正しくない。玉水が詠んだのは、連歌の付け句「深き思ひのたぐひなるらむ」だけである。

正解

28

②

第4問 漢文 『杜詩詳註』

〔書き下し文〕

嗚呼哀しいかな。兄の子あり甫と曰ふ、服を斯に制し、徳を斯に紀し、石に斯に刻む。或曰はく、「豈に孝童の猶子なるか、奚ぞ孝義の勤むること此のごとき」と。甫泣きて対へて曰はく、「敢へて是れに当たるに非ざるなり、亦た報ゆるを為すなり。甫昔病に我が諸姑に臥し、姑の子又病む。女巫に問へば、巫曰はく、『楹の東南隅に処る者は吉なり』と。姑遂に子の地を易へて我を安んず。我是れを用て存し、而して姑の子卒す。後に乃ち之を走使より知る。甫嘗て人に説くこと有り、客將に涕を出ださんとし、感ずること之を久しくし、相ひ与に諡を定め、義と曰ふ」と。

君子以為へらく魯の義姑なる者は、暴客に郊に遇ひ、其の携へる所を抱き、其の抱く所を棄て、以て私愛を割つと。景君焉有り。

是を以て茲の一隅を挙げ、彼の百行を昭かにす。銘して韻せず、蓋し情至れば文無し。其の詞に曰はく、「嗚呼、有唐の義姑、京兆杜氏の墓。」

〔通釈〕

ああ哀しいことであるよ。(あなたの) 兄の子である私、甫は、(あなたの死に際して) 喪に服し、その(生前の) 徳を記して、墓誌を石に刻みました。ある人が言いました、「(あなたは) あの孝童さんの甥ですよ、どうしてこのように(叔母さんにあたる方のために) 孝行につとめられるのですか」と。私、甫は泣いて(その人に) お答えして言いました、「とんでもないことです、(私は亡き叔母への) 恩に報いようとしているだけなのです。私、甫は昔叔母の家で病に臥したことがあって、叔母の(実の) 子もまた病にかかりました。(その時に呼んだ) 女の祈禱師に尋ねると、祈禱師は、『柱の東南側にいると、運氣がよくなります』と言いました。(すると) 叔母はすぐに自分の子の(寝ていた) 場所を変えて、私を柱の東南側に寝かせてくれたのです。私はそのために(こうして) 生きており、(しかし) そのために叔母の子は亡くなりました。後になってやっと(私は) このことを使用人から聞いて知りました。私、甫はかつて(このことを) 人に話したことがあり(ましたが)、その人は今にも涙を流しそうになり、しばらく感慨にふけり、二人で(叔母のために) 諡を定めて、『義』としました」と。

劉向の『列女伝』によれば、(昔) 魯の国の義姑なる者は、(魯に攻め込んだ斉の軍の) 暴徒に郊外で遭遇し、手を引いていた兄の子を抱き、抱いていた自分の子を捨てて(義のために兄の子を守り、自分の子に対する) 私情を絶ったということです。(私の) 叔母もこれと同じなのです。

それゆえ、この一つの出来事を取りあげて、(叔母の日頃からの) あらゆる行いを顕彰しようと思うのです。銘文は作りますが韻を踏まないのは、真心がこもれば飾りはいらなと思うからです。(よって) 墓誌銘の文言は、「ああ唐王朝の義姑、長安の杜氏の墓」としました。

〔解説〕

問1 語の意味の判断の問題 (ア) 基礎 (イ) 標準

二重傍線部(ア)「対・(イ)「乃」のここでの意味として最も適当なものを、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)「対」は、「こたフ」(ハ・下二段)と読めるかどうかの問題である。文中のように、「こたへて曰はく」という形になって用いられることが多い。「こたフ」と読む字は、「答・応・対」などがあるが、「対ふ」は、原則的には「目上の人にお答えする」意である。正解は③「こたえて」。

(イ)「乃」は、「すなはチ」であることは言うまでもない。二〇〇七年度本試に読みの問題、二〇一六年度本試に意味(そこで)の問題で出題歴がある。「すなはチ」は、他にも、「輒」が二〇〇四年度追試に読みの問題、「即」が二〇一六年度本試に意味の問題で出ている。

「乃」の最も基本的な意味は、二〇一六年度本試の答のように「そこで」であり、漢和辞典的には、次のような訳し方が並んでいる。

- ① そこで。そうして。(順接)
- ② それなのに。かえって。(逆接)
- ③ なんと。意外にも。
- ④ わずかに。(数量の限定)
- ⑤ とりもなおさず。(強意)

また、同じく「すなはチ」と読む「即」と同じく、「すぐに」という意味になることもなくはないが、「乃」の意としてはあまり一般的ではない。

よって、選択肢を見てみると、ズバリこれだ！と言えるものがない。設問には、「ここでの意味として最も適当なもの」を選べとあるので、文脈から考えれば、「後に乃ち…」であるから、「後になってやつと…」とするのが「最も適当」であろう。

「後になってすぐに」①「後になっていつも」②「ここでは意味がおかしいし、③「ことごとく」なら「尽・悉・畢(ことごとく)」、⑤「くわしく」なら「具(つぶさし)」である。正解は④「やつと」。

正解 (ア) 29 ③ (イ) 30 ④ (各4点)

問2 傍線部から読み取る筆者の状況の判断の問題 基礎

傍線部A「奚孝義之勤若此」から読み取れる杜甫の状況を説明したものととして最も適当なものを一つ選べ。

傍線部A「奚^{なん}ぞ孝義の勤むること此^かのごとき」は、直前に、(注4)がついている、「豈^あに孝童^{かうどう}の猶子^{いうし}なるか(＝あなたはあの孝童さんの甥ですよね)」があるから、甥なのに、「どうして(叔母さんにあたる方のために)孝を尽くすことがこのようであるのですか」という意味である。

「此くのごとき(＝このようである)」の内容は、本文1行目の、「服を斯^こに制し(注2＝喪に服し)」、徳を斯^こに紀し(＝徳を記して)、石に斯に刻む(注3＝墓誌を石に刻む)」という行為である。

そもそも、前書きに、「幼少期に」「育ててもらっていた」「叔母の死を悼んだ文章」とあるのであるから、当然、正解は②である。

①は、「若いにもかかわらず」がよけいである。

③・④は、いずれも、叔母に「孝行を尽くせて(尽くして)いない」ことになっているので、間違いである。

⑤は、「正義感が強いので」が本文にない。また、叔母は亡くなったのであるから、「困窮した叔母に孝行を尽くしている」は間違い。

正解 31 ② (7点)

問3 傍線部の理由説明の問題 基礎

傍線部B「非^三敢^当是^也」は、「とんでもないことです」という恐れ多い気持ちを示す表現である。なぜ杜甫がこのように語るのか、その理由として最も適当なものを一つ選べ。

設問に、この傍線部が「とんでもないことです」という「恐れ多い気持ちを示す表現」であるとあるが、これは、ある人の、「(あなたは)あの孝童さんの甥ですよ。どうしてこのように(叔母さんのために)孝を尽くされるのですか」、つまり、「そこまでなさらなくてもいいのではありませんか」というニュアンスの問いかけに対する、「とんでもないことです」という表現である。

この傍線部の直後で、杜甫は、「亦^た報^をを為^すなり」と言っている。「報」は、当然ここでは、自分を育ててくれた、あるいは、このあとに紹介されている、病気の折にわが子よりも自分を救ってくれた叔母の「恩」に対する「報恩。報謝」の思いである。よって、正解は⑥。

①は、「孝行を尽くしたという自負」、「より謙虚でありたい」がキズ。

- ②は、「他者に対して優しくありたい」、「まだその段階にまで達していないと意識」がキズ。
- ③は、「生前の叔母の世話をしていた」のかどうかは、本文では判断できない。「喪に服することしか」もキズである。
- ④は、「叔父だけでなく」が、おそらく叔父も亡くなっているのかもしれないが、本文からは判断できない。
- ⑤以外の選択肢は、いずれもほぼ全体が間違っている。

正解 32 ⑤ (7点)

問4 傍線部の書き下し文(読み方)と解釈の組合せ問題 標準

傍線部C「処楹之東南隅者吉」の書き下し文とその解釈として最も適当なものを一つ選べ。

返り点の付け方と書き下し文の組合せではなく、二〇一八年度と同じく、書き下し文と解釈の組合せ問題であった。書き下し文の判断としては、何か「句法(句形)」のポイントや、読み方に特徴のある語(字)がないかを見るのであるが、傍線部Cにはポイントがない。

とすると、解釈のほうを見て、文脈にあてはまるものを考えることになる。

「女巫」のこの言葉を受けて、叔母は、「子の地を易へ以て我を安んず」、つまり、自分の子の寝ていた場所を変えて、杜甫のほうを「安んじ」るように入れてくれ、その結果、次の問5の傍線部D「我是れを用て存し、而して姑の子卒す(＝私はそのために生きており、しかし、そのために叔母の子は亡くなった)」ということになるのである。

ということとは、「運氣がよくなる」ほうに杜甫の寝場所を移してくれたのである。寝場所の位置がポイントであるから、正解は③「柱の東南側にいると、運氣が良くなります」が適当である。

- ①は、「柱を処分すると」がキズ。
- ②は、「東南側へ向かってゆくと」がキズ。
- ④は、「柱を家の東南側に立てると」がキズ。
- ⑤は、「柱に手を加えて」がキズ。

正解 33 ③ (6点)

問5 傍線部の内容説明の問題 標準

傍線部D「我用_レ是存、而姑之子卒」の説明として最も適当なものを一つ選べ。

この傍線部「我是れを用_レて存し、而して姑の子卒_ス」には、漢文学習上、たいへん重要な語があり、それがわかっていると、答は一気に二つに絞られる。

ポイントになる語は「卒す」で、訓よみすれば「おハル(ラ・四段)」「おフ(ハ・下二段)」で、「終わる」「終える」意味であるが、「死ぬ」意にも用い、その場合はサ変動詞「しゆつス」と読むことが多い。

この知識があれば、答は①か⑤である。「我(杜甫)」は「存」し、「姑の子」は「卒」したという対比から考えても、「自分」は「助かり」、「姑の子」は「死んだ」のでなくてはならない。

①は、「女巫のお祓いを受けたことで元氣を取り戻した」が間違い。女巫はお祓いなどしていない。よって、正解は⑤である。

②・③・④は、「叔母の子」が亡くなっていない点で間違いであるが、②は前半は正しい。③は「叔母のおかげで気持ちが落ち着いた」、④は「叔母が優しく看病してくれた」にもキズがある。

正解 34 ⑤ (7点)

問6 傍線部の内容説明の問題 応用

傍線部E「県君有_レ焉」の説明として最も適当なものを一つ選べ。

選択肢を見ると、冒頭の「叔母は魯の義姑のように」と、末尾の「義と呼べるということ」は共通している。とすると、要は、「魯の義姑」の行動と、「叔母」の杜甫に対してとった行動とがどのようであったかが書かれている、選択肢の中間部を考えればよいことになる。

「魯の義姑」については、詳しい(注9)がっており、「自分の子を抱き、兄の子の手を引いていた際に、『暴害(注10＝暴徒)』と遭遇した」とあ

る。で、その状況になった時、「其の携へる所を抱き、其の抱く所を棄て、以て私愛を割た（＝手を引いていた兄の子を抱き、抱いていた自分の子を捨てて、私情を絶）ったのである。詳しいなりゆきは書かれていないが、自分の子は暴徒の手にかかって殺され、兄の子は抱いて逃げて助かった、ということなのであろう。

これは、杜甫の「叔母」の、自分の子の寝ていた場所を変えて、運氣がよくなる方に兄の子である杜甫を寝かせた、それによって、杜甫は命を拾ったが、叔母の子は亡くなった、という状況とまったく同じである。正解は②。

①・④・⑤は、選択肢の中間部分が、いずれも大きなキズである。

③の「いつも甥の杜甫を実子と同様に愛した」は、ふだんはそのようであったであろうと思われる微妙であるが、より正確に言うなら、「義を重んじて実子以上に甥の杜甫を大切にした」というのが正しいであろう。

正解 35 ② (7点)

問7 傍線部の内容説明、及び筆者の趣意の判断の問題 応用

傍線部F「銘而不韻、蓋情至無文」についての説明として最も適当なものを一つ選べ。

「銘して韻せず」は、各選択肢に共通している、「韻を踏まない銘を記した」ということである。各選択肢のそのあとの内容が、「蓋し情至れば文無し」に相当する。

その前に、各選択肢冒頭の、叔母についての表現を見ると、

- ① 「慎み深かった叔母」
- ② 「毅然としていた叔母」
- ③ 「徳の高かった叔母」
- ④ 「恩人であった叔母」
- ⑤ 「たくさんの善行をのこした叔母」

となっている。④は当然正しいとして、③も1行目の「徳を斯に紀し」からみて正しいであろう。しかし、①や②のようであったのかどうかは、本文からは判断できないし、⑤の「たくさんの善行」も具体的には本文からはわからない。

文に「韻」を踏ませるということは、散文でなく韻文にするわけであるから、文のひびきをそろえ、文を美しくすることになる。これが「文無し」の「文」で、「かざり。いろどり。外面的修飾」の意を表している。(注13)の「通常は修辭として韻を踏む」の「修辭」がこれにあたる。「情至れば文無し」とは、「真情が十分に極まれば、飾りはいらぬ」ということである。

よって、**正解は③**。「それは自分を大切に養育してくれた叔母の死を偲び」も、本文全体の趣意に合致している。

- ①は、「人知れず善行を積んでいた叔母の心情に背く」がキズ。
- ②は、「取り乱しがちな自分の感情を覆い隠し」がキズ。
- ④は、「恩返しできなかった後悔の念」、「ことばが見つからず」、「巧みな韻文に整えられなかった」がキズ。
- ⑤は、「長文になるので」「できるだけ短くした」がキズである。

正解 36 ③ (8点)